

とじとじ - 桜丘閉店物語 -

MAMA 著



paikka books

この物語が全て現実に基づいたものとは限りません。

桜丘再開発区域地図
桜丘町1・3・8・11



富士屋本店

かいどう

本
あおい書店

第一章 かいどう

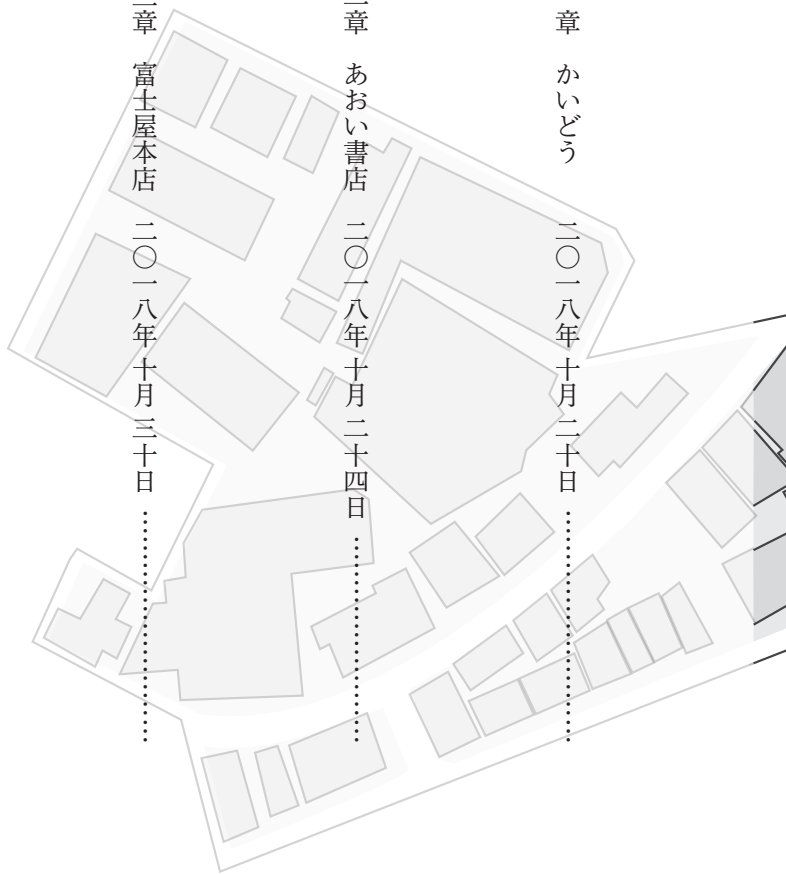
二〇一八年十月二十日

第二章 あおい書店

二〇一八年十月二十四日

第三章 富士屋本店

二〇一八年十月三十日



第一章 かいどう



戦前 - 駄菓子屋として創業
昭和 30 年頃 - 食堂へと改装
2018 年 10 月 20 日 - 閉店

「お食事処 SYOKUDOU かいどう」と書かれた壁面看板は、桜丘の風景にすーっと溶け込んでいて、その歴史を感じさせる。和菓子屋として始まり、戦前から桜丘のこの場に店を構えていた。昭和三十年頃から食堂としての営業を始め、六十三年以上愛されている中華料理定食屋である。看板から足元まで目線を落とすと、「いらっしやいませ」と書かれた段差プレートがあり、目線の先に地下へと続く短い階段が見える。階段の左手にはかいどうのメニューの食品サンプルが並んでいる。階段を下り、灰色の自動ドアのボタンを押すと、ガラスの扉が右に動き、白いコックコートを着た四代目の店主と、いまは料理長である先代の店主、そして緑色のエプロンを身に着けた女将が迎えてくれる。

テーブルにつくと、女将さんがお冷を持ってきてくれた。立てかけられたメニューはシンプルなもので、かいどうの良さである素朴さをよく表していた。

「ここのレバニラ定食が絶品なの」

「そうなんだ」

彼女は手慣れたしぐさで女将を呼び、私の注文も聞かずに、レバニラ定食を二つ頼んだ。

彼女は同期だが、誰よりも思い切りがよくハキハキしているし、先輩からも後輩からの信頼も厚い。普段はあまり話をしないが、たまたま休憩が被った彼女と食事をすることにになり、彼女がイチ押し場所を紹介してくれるというので、今二人でここにいるのである。身なりもきちんとしていて、丸の内のビル最上階に店を構えるおしゃれなフレンチレストランに行っただけで、丸の内をイチ押しだということにも驚いているし、なによりも一緒に話しているこの状態に驚いている。なんとなく落ち着かなくて、割り箸を包む「かいどう」と書かれた紙の角を折ったり戻したりしていた。「かいどう」という名の町の食堂があることはわかっていたが、実際に来たことはなかった。薄橙色の椅子に、木製の机。壁紙はクリーム色で、床の色はうすい茶色。落ち着いた装飾で、どこかあたたかい雰囲気がある。店内にはスーツを着た人や、作業着を着た人の笑い声が響いている。こどもが口いっぱいカレーをほおぼり、「おいしいね」と嬉しそうに話す声や、なにやら噂話をする奥様たちの声も聞こえてくる。町の食堂として、愛され続けてきたことを、肌から実感できる。

「ねえ、聞いている?」

「…あ、ごめん」

「ううん、大丈夫。それで、あなたは休日の日はなにをするの？」

しまった。沈黙を紛らわそうと、彼女の趣味や休日なにをしているのかを聞いたのに、どきまぎして全然聞いてなかった。突然話を振られたことへの動揺を悟られないように水を飲んだ。

「そうだな。映画とか、観るかな」

「そうなんだ。どんな映画？」

「アクシヨンとか」

「え、意外だ」

何が意外かを聞こうとしたところで、女将が定食の準備をすまし、目の前に出来立てのレバニラ炒めが置かれた。「食べよう」と言って、夢中になって食べたのを覚えている。これが、たしかに絶品だったことも覚えている。

あれから何回か彼女とかいどうへ行き、一人でも何度も通うようになっていた。

「おう、今日もレバニラか」と笑う店主と、「空いてるところ座りな座りな」という女将と、もくもくと料理を作る寡黙な料理長がつくるかいどうの雰囲気があると心地よくて、気づけば常連になっていた。彼女がいるのではないかという期待も、抱い

ていたりいなかったり。とにかく足しげく通うようになった。

そんな「かいどう」が、十月二十日で閉店することを知った。

「再開発区域に当てはまる店は、十月いっぱいまで退去するように言われているらしい」
桜丘の喫茶店でどこかの大学生に見える三人がそう話しているのをたまたま耳にした。調べてみるとそれは確かで、店ごとの最終営業日は異なるが、みんな十月いっばいで店を畳むようだ。一月にはビルの解体作業が始まる。あまりにも衝撃で、その日の飲んだコーヒーの味がわからなかった。

かいどうの最終営業日、その長い歴史が終わる瞬間に立ち会おうと、かいどうを訪れた。少し離れた場所でも感じることでできる熱気に気圧されそうになりながらも、なんとか階段を降り、自動ドアの前で立ち止まる。自動ドアには張り紙があり、こう書いてあった。

「いつもご愛顧いただきありがとうございます。この度渋谷南口の都市開発により『かいどう』は平成30年10月20日（土）をもちまして休業させていただきますこととなりました。これまでの皆様のご応援心より感謝申し上げます。誠にありがとうございます。」

張り紙を見ているあいだに、何人かが店の外へ出てくる。一人で来ている者もいれば、家族や同僚と来ている者もいた。みんな今日が最終日だと知っているようだ。店のなかはかなり混んでいた。煙草の煙がたちこんでいて、ビールジョッキやビール瓶が机を埋め尽くしていた。いつもは昼に来ていたし、夜も普段は落ち着いているので、この様子にはかなり驚いた。町の食堂から町の居酒屋へ変わったようだった。人が多く、回転も速くないので、いつもはカウンターに置かれている椅子はしまわれていて、立ち飲みのための場所になっていた。もちろんここも人でいっぱいだった。

女将が私に気が付いて、「いらっしやい」と声をかけてくれた。いつもと変わらぬ緑のエプロンを身に着け、ビール瓶を三本と餃子の皿を手持っていた。「どうぞ」と言っただけをテーブルに置くと、私のほうへ向かってきた。

「ごめんなさいね、お客さんいっぱい、他の人と同じテーブルでもいいかしら」「問題ないです。大丈夫です」

案内されたのは、私がいつも座っているテーブル席だった。すでに三人座っていて、みなひとりで来ているようだった。「どうも」と声をかけて席に着き、いつも通りに立てかけられているメニューを手を取った。メニューは長年蓄積してきたような油の

汚れて、少しべたつとしていたが、まったく気にならなかった。見るとメニューの裏側に赤いバツ印がたくさん書かれていた。驚くことに、ほぼ売り切れているようだった。幸い、食べ収めようと考えていたレバナラ定食には印が付いていなかったの、それを注文した。

「そうと思ったよ。混んでいるから少し時間かかるけど待ってね」

女将が微笑みながらそう話し、また忙しそうに厨房へもどっていった。最終日にかいどうにいたしたのは、よく見かけるような常連さんばかりだったが、顔を知らないようなひととたくさんいた。真っ白いTシャツに白い帽子をかぶった男性に、いつもカメラを肩にぶらさげている初老の男性。婦人会の方々に、近所に住んでいるであろう三人の家族。普段のコック服からは想像もつかないような、おしゃれな帽子をかぶったパリジャンの店主。そして、かいどうの隣で老舗の八百屋「高野商店」を経営するおじさん。かいどうの四代目店主と話をしたり、料理長の写真を撮ったり、女将と交えて写真を撮ったりと、みんなそれぞれのやり方で、かいどうの終わりと共にいた。そのうち、レバナラ定食が目の前に置かれ、夢中で食べた。食べている途中で、色紙みたいなものがこっちのテーブルへと回ってきた。色紙の真ん中には大きな字で「かい

「どう女将」と書かれていて、その周りにはいろいろな色で、隙間なく描かれているメッセージがあった。裏をめくると、そこにもメッセージが書かれていて、テーブルにいた三人は裏に「ありがとうございました」「ごちそうさまでした」「最高でした」と書いていたが、私はなぜだか、表に書きたかったので、少しの余白に、「レバニラ定食は最後まで絶品でした」と書き、その下に自分の名前を書いた。色紙か、いいな。うれしだろうなとぼんやり見ていると、彼女の名前を見つけた。ドクンと心臓が跳ねた気がした。ここにいるのか、とあたりを見回したが、特にみつめることはできなかった。

「どうぞどうぞ空いてるところに座ってください」女将の声がした。あとからあとから店の外から途絶えることなくお客さんが来ているようだった。あとから来た方々に席を空けようと、私はカウンターへと移動した。

「おう、お前が来るかと思って、レバニラ定食一人前は残しておいたよ」

カウンターへ移動した私をみるや、店主がにこやかに笑った。眼鏡の奥に、少し寂しそうな色を感じて、私は「ははは」と笑っただけだった。料理長は相変わらず沈黙していて、次から次へと流れてくる注文に答えていた。いつもはカウンターにどんぶ

りや皿がたくさん並んでいるが、今日はすべてしまわれていたの、厨房の中、店主と料理長の手さばきがよく見えた。

「きみはよくきていたのか」

カウンターの隣になった方が前触れなく私に話しかけた。いつも肩からカメラをぶらさげている初老の男性だった。

「ここ一年くらいですが、よく来ていました」

「そうか、おれはもう長くここにきているよ」

「そうなんです」

彼は近くの役所で働いていて、三十年近くかいどうの常連だった。昔から桜丘の写真撮るのが趣味で、もう何年分にも桜丘の写真をもっている。長年変わる ことのなかった桜丘が、ここ何年かで急激に変わっていくことを、興味深くも寂しく思いながら、写真を撮っているようだった。彼と話をしながら、かいどうが立て壊されたあとは、東急のビルが建つことを知った。かいどうは、東急ビルが建ったあとの場所と区画を押さえてはいるけど、営業を再開するかどうかはわからないようだった。

そのうち後ろのほうで誰かが、「みなさん、聞いてください」と叫んだ。振り返る

と、店主と料理長と女将が立っていて、隣には小さな子供三人が色紙を抱えて立っていた。さつきみなは注目を集めた人が、どこから出したマイクを、店主に渡した。「みなさん、今日は本当にありがとうございます。僕は、四代目の店主です。かいどうの歴史を途絶えることなく、まだまだ続けていきたいと考えています。みなさんの応援にお返しできるよう考えてきますので、また再開した際には、ぜひお越しください」とスピーチした。料理長は「ありがとうございます」と短く述べた。再開したいとは言っているが、聞いた話によると資金的に難しいようで、まだわからないのだそうだ。女将は、桜丘が変わっていくことにさみしさを覚えていたようだった。おしゃれなビルには似合わないし、今の食堂の形態は流行らないけど、それでもせめてかいどうは変わらない存在でいたいと思っていたことがわかった。かなわないけど、それでもこうしてみなが来てくれてうれしいと話していた。話しながら涙をこぼしている女将を見て、店内にはさみしい沈黙が流れた。まだまだだと思っていた終わりが、刻々と近づいていることを、みんな意識しているようだった。三人のスピーチが終わると、隣に立っていた子供たちは、少しもじもじしながら、ひとりひとりに色紙を渡した。店主と料理長と女将は頭を下げ、私たちは拍手をした。どこから嗚咽が聞こえて、

どうしようもなくきみしくなった。みんなで記念写真を撮ると、自動ドアがまた開き、また違うお客さんが入ってきた。三人はあわただしく厨房へ戻り、店内はまた喧騒に包まれた。うるさいはずなのになぜか心地よかった。

そしてついに閉店の瞬間がやってきた。二十三時閉店のはずだったが、二十三時には閉まらなかった。お客さんも少しでも長くかいどうを味わっていたかったし、女将たちも、かいどうを閉めてしまうことが惜しかったようだ。結局夜中の一時まで営業終了時間が伸びた。机に散らかったビール瓶や皿や割りばしを、残ったみなで片づけて、会計を済ませると、女将たちがひとりひとりに握手をして、私も含めてお客さんはみんな外に出た。振り返ると、明るく光っていた壁面看板の電気は消えていた。ほんとうに終わったのだと物語っているようだった。「ありがとうございました。」と、店主、料理長、女将の三人は店の前で残ったお客さんにお辞儀をして、さみしそうな顔で店に戻った。私はしばらくその場で立ち尽くしていたが、しばらくして、かいどうをあとにした。

帰り道は、彼女のことを思った。彼女とかいどうで何回か食事をしたあと、彼女の転勤が決まった。桜丘からはるか遠くへ行くことになり、「かいどうに行けないの

2018年10月20日

は残念」だと嘆いていた。結局最後まで連絡先を交換することはなかったのだから、彼女がどうしているのかは全く分からなかった。彼女もかいどうの最終日に来ていたのか。そう思うとなんだかうれしいような、切ないような気持ちになった。もう桜丘へ帰ってきてても、かいどうはないのだと知ったとき、どんな気持ちだったのだろうか。私の注文も聞かずに得意げにレバニラを頼む彼女の顔が浮かんで、消えた。

第二章 あおい書店



2010年3月 - 渋谷南口店開店

2018年10月24日 - 閉店

桜丘が再開発で、閉店が立て続けにおきている。再開発区域にあてはまる店のドアや窓に、最終営業日を知らせる張り紙が張られている。あおい書店も例外ではなく、二十四日に閉店するという張り紙があったので、最終日に行ってみることにした。

あおい書店は、渋谷南口から歩いて三分ほどで桜通りの目の前に建っていて、二階建てのどこにでもあるような大型本屋である。

建物の前にある何段かの階段を上がり、自動ドアを通り抜ける。入ってすぐ右手にレジがあり、奥までずらりと並ぶ灰色の本棚とジャンル分けされ、きれいに並べられた本が目に入る。入口から奥へ、ガイドブック、雑誌、自己啓発本、ビジネス本、新書がエリアごとジャンル分けされて陳列されていて、新書エリアの隣には文庫のエリアがある。

最近、私の周りにすこし変化があり、もっと幅広く深く知識を身に付けようと考えていたので、車の雑誌を横目に新書のエリアへ足を運んだ。しかし、どれもあまりしつくりこず、しばらくの間店内をふらふらと歩きまわった。空調はついていなかったが、閉め切られたような暑さがあり、店内は静寂に包まれていた。店内はそれほど広くはなかったが、店員さんが四人いた。寡黙そうな男性に、少し猫背の男、黒髪に眼鏡を

かけた青年と、愛想のよい茶髪女性が、あおい書店の黒いエプロンを身に着け、各々の仕事をしていた。

寡黙そうな男は眼鏡をかけていて、少し長く垂れ下がる前髪を無表情でかき分けながら、レジの奥でなにかを書いていた。少し猫背の男はどこかプライドの高さを感じさせるような口調だ。レジを担当しているようで、手慣れた手つきで本にカバーをつけていた。黒髪に眼鏡をかけた青年は、本の整頓をしており、愛想のよい茶髪の女性は、箒で掃き掃除をしていた。この四人が最終日のあおい書店を運営しているのだなと思いつつ見ていると、女性の店員と目が合ってしまった。

もうすでに店に一時間もいるので、怪しまれたりほしくないだろうかととっさに思った。そして、なぜだか慌てて「クレジットカード使えますか」と聞いた。「ええ。お使いいただけますよ」と笑顔で答えてくれた。

「ありがとうございます」といい、少し足早に二階へと向かった。

二階は、右側が漫画のエリアになっていて、左側は参考書、語学書、コンピュータ知識に関する本、料理本、子育て本、アート集、写真集などが並べていた。品ぞろえはかなり豊富で、他の本屋ではあまり見かけないような珍しい参考書も置いてあった。

引き続き本を眺めていると、ポケットに入れていた携帯が鳴った。先輩からのメッセージだった。

「あおい書店にいるの？」

「そうです」

「ぼくも、あおい書店の最終日に立ち会いたい。あと十分ほどで着く」

先輩も、桜丘が再開発によって変わっていくことに関心を抱いていて、たびたび桜丘の変化について話していた。最近話すようになったので、まだあまりどんな人かをつかめていないのが事実だが、先輩の言動のひとつひとつはよく考えられていて、話しているとハッとさせられることが多く、学びたいものを多く教えてくれる人だ。先輩を待っている間に、最近どこかで感動的だと紹介されていた「星の王子さま」と「スパイン語の王子さま」を手に取り、また本屋を歩き回った。

あおい書店にいた客は、時間が遅いせいかなかった。一階には四、五人いたが、二階にはほぼ誰もいなかった。しかし、近くには特に学生は見かけなかったが、大手予備校が付近にあるので時期や時間帯によっては受験生などがここを利用するだろう。私が見た客の中では、近所に住んでいるからか、ラフな格好で雑誌を立ち読みし

ている人がいたり、仕事帰りだからか、スーツで経済政策についての本を読んでいる人がいたりした。ここの付近に住んでいる人や職場が近い人が多く利用する書店なんだろうと考えた。

レジに向かう途中で、値引きのある商品を見つけた。富士山のハンカチに、牛の形の付箋などが二十円引きで置いてあった。ハンカチをいくつか買おうと考えたが、結局買わなかった。少し猫背の店員は変わらずレジの前において、店内の様子を見渡していた。奥には寡黙そうな男がまたなにやら書いていたが、二人の会話で、この男が店長であることが分かった。少し猫背の店員が会計の処理を行っている間で、私は聞いてみた。

「今日って、ここ閉店なんですよね」

「はい。そうです」

少し猫背の店員が、本にカバーをかけながら答える。

「この本は、どうなってしまうのですか？」

「え」

カバーをかける手を止め、少し猫背の男性が少し困ったような顔を浮かべる。少し

の沈黙が流れ、後ろにいた店長が「この本は、すべて卸売り業者に返却されます」と答えた。

「そうなのですね。そうか」

納得していると、少し猫背の男が袋を私に手渡しながら、「このあたりの店舗でしたら、池尻大橋が一番近くになりますので、そちらをご利用いただければと思います」と言った。

もう何十回もこのセリフを述べているのだろう。笑顔を浮かべることもなく、残念そう表情を浮かべていたわけでもなく、機械的に淡々と伝えてくれた。

「ありがとうございます」

感情をあまり感じられない声を背に、私はあおい書店を出た。しばらくすると先輩が到着し、またいっしょに店の中へ入った。

「ぜんぜん人がいないね」

「そうなんです」

黒髪の店員が一瞬私たちを見たが、すぐに目をそらし、また本の整理を始めた。どうやらあいいうえお順に並べているようだったが、まぎわらしいものがいくつかあった

らしく、本のカバーを外して正確に名前を確認していた。

「あおい書店は誰にも見送られることなく終わっていくのか、なんだかさみしいな」

「さみしいです」

先輩はそうだねと頷き、周りを見渡した。

「さようならのアナウンスとか、流れるのかな」

「うーん。流れないかもしれせん」

「そうか、さみしいな」

「さみしいです」

先輩は最近新しく発売された料理本を探しているとのことだったので、私も先輩に付いてお店の二階へ上がった。

いろいろな種類の料理本が置いてあり、その隣には子育てが漫画で面白おかしく描かれた本が置いてあった。犬と一緒に遊ばせながら育てると基礎体力や免疫力が上がるらしい。子どもができたら、コーギーでも飼おうかと思った。

「うーん。ないな」

「ないですね」

もう閉店するから、新しい本は入荷していないだろうと話しながら、しばらく一緒にふらふらと歩き回った。一階に降りた先輩は子供に買おうと文庫を探していたが、結局心に刺さるものがなかったようだった。私はたまたま目に入った『ライ麦畑で捕まえて』を思わず手に取った。高校生のときに後ろに座っていた、多くを語らないがいつも丁寧な言葉を紡ぐ同級生を思い出した。現代文の成績でいつも競い合っていて、いつも負けていた。お互いに本が好きだったので、よく好きな本を紹介しあっていた。『ライ麦畑で捕まえて』は、その同級生がおすすめてくれた本の一冊だった。思い切って買うことにした。

一方で先輩は自己啓発本のコーナーの付近で、何冊か本を選んでいった。一緒に眺めながら、先輩が手に取りそうな本を見つけた。

「先輩、これ」と言いかけたと同時に、先輩はそれを手に取り、「これいいじゃん」と言った。先輩とは付き合いがまだまだ浅く、お互いをよく知っていたわけではないので、一瞬考えを覗き見れたような気がして、うれしくなった。

「それ、手に取ると思っていました」

「はは、そうか」

先輩はそれと、先輩の友人が書いたという本を手でレジへと向かい、私もそれに続いた。

レジへと向かう途中、また目についた本をバラバラとめくっていると、少し猫背の店員が私の顔を覗き込みながら、「もうそろそろ閉店ですので。すみません」と言った。話しかけてくれた店員さんの物言いは、悲しくなるほど淡々としたものだった。

レジに建つ初老の店員も、先輩が会計をすますと、「このあたりの店舗でしたら、池尻大橋が一番近くとっているので、そちらをご利用ください」と機械的に繰り返した。

ここにいる店員たちは、最終日というのに、悲しくないのか。思い入れはないのか。そう思いながら先輩と一緒に店を出た。閉店時間のおよそ五分前だった。さようならのアナウンスも、ありがとうございましたのアナウンスもなかった。

「シャッターが閉まるのを見届けよう」

「はい」

ふたりはあおい書店の入口から少し離れた場所に立ち、その瞬間を待っていた。

今まさに、あおい書店渋谷桜丘店の歴史にピリオドが打たれる。それを知っている

のか、知らないのか、知っていても関心がないのか、通行人はそんなことをおかまひなしにどんどん通り過ぎていく。二十四時ぴったりにエプロンをつけた黒髪の青年が出てきて、シャッターを操作するレバーを迷いなく回し始めた。

「これで終わりか」

「そうですね」

キキキと音を立てながら、シャッターが下りていき、ついに最後の瞬間だと、すこしドキドキした。しかし、シャッターが半分までしまったところで、黒髪の青年はなぜか手を止め、店の奥へと戻ってしまった。

不思議に思っていると、その青年と猫背の男性と女性の店員が、私服に着替えた状態で、シャッターをくぐって出てきた。バイトが終わって解放されたような笑顔で楽しそうに面白い書店を後にした。時折閉店を見守る私たちを振り返っては、なにやら話していた。こんな遅くに最後の閉店を象徴する、シャッターの閉まるシーンを待っている人は、はたから見たらおかしいだろう。

「終わってしまった、のか」

明日の営業時間が来たら、またこの四人に会えそうなくらいさっぱりしていた。少

し猫背の男性は相変わらずレジでスタンバイをし、店長はその後ろで何やら書き物をし、黒髪の青年は目を細めながらも本をきれいに整頓し、愛想の良い女性が変わらない笑顔で店内の掃除をしている光景が頭に浮かんだ。ありがとうございます。あの挨拶や、拍手とともに降りるシャッターはなくとも、この三人が帰り際に店長と別れの抱擁をするのではないかと勝手ながらに思っていた。半分とじられたシャッターの奥のレジには、まだ店長が残っていて、けだるそうにレシートの整理をしていたり、レジのお金を数えているようだった。この作業が終わったら、シャッターが閉まるのではないかと淡い期待を抱き、もうすこし待ってみることにした。

「思っていたよりあっけなかったな」

「そうですね」

飲み会の後のサラリーマンや大学生、寒そうに足早に歩く者、自転車で通り過ぎる者。時折半分しまったあおい書店のシャッターの前を何人もが素通りした。時折立ち止まって写真を撮る者もいたが、ほとんどは無関心に通り過ぎるだけだった。しばらく待っても店長が店から出てくる気配はなく、ついに先輩は帰ってしまった。

「またな」

「はい、また」

シャッターは完全に閉まるのが、イメージにある閉店だったので、なんとかして最後まで見たいと思ったが、とうとうしびれを切らして、帰ってしまったと思った。その矢先に、赤と青が映えるように光っていたあおい書店の看板の電気がぽつんと消えた。ぼんやりとそれを眺めていたので、一瞬あたりが暗くなったかという錯覚に陥りそうになった。

「あ、ここ閉店するのか」

通行人の一人がそう言って、写真を撮った。

「残念だな。駅から近くてよく来ていたのに」

もう一人がそう言って、また写真を撮った。スーツを着たサラリーマンの二人組だった。どんな気持ちなのだろうか。悲しくないのだろうか。さみしくないのだろうか。家や職場の近くの本屋が閉店したら、私はどう思うのだろうかと考えてみたが、いまいち想像できず、やめた。今はただこの光景に、胸がざわつくのを受け止めて感じるのが大事だと思った。それにしても、何なのだろうか。

まもなく、店長がシャッターをくぐりぬけてきた。まだあおい書店のエプロンを身

に着けたままだった。もう光を失った看板の横に建ち、たばこを吸っていた。長い前髪をまた無表情でかき分けるそのすがたは、なんだか哀愁が漂っていた。何年この店に勤めていたのだろうか。どんなことを思っているのだろうか。こんなにもあっけなく終わっていいのだろうか。いろいろな疑問が頭に浮かんだが、ついに聞くことはできなかった。店長はふたたび店に戻り、シャッターが完全に閉まるのを見ることはできないと確信した私は、なんだかもやしたような、がっかりしたような足取りで、あおい書店を後にした。

第三章 富士屋本店



明治 18 年 - 酒販店として創業
昭和 46 年 - 立ち飲み酒場へと改装
2018 年 10 月 30 日 - 閉店

十月三十日。十八時半過ぎに富士屋本店に着いた。最終日ということ、やはり多くの人が並んでいた。最終日にも関わらず、営業はいつもと同じ二十一時閉店ということだった。十八時半の時点で、私の前には十五から二十人くらいが並んでいた。ああ、もしかしたら入れないかなあ。いや、さすがに入れるかあ。そんな思いが交互にやってきた。列は、先日二十日に閉店したかいどうの店先を抜け、歩道に沿って途中で折れ曲がりドトールの近くまで伸びていた。私が並んでからもすぐに後続ができるほどだった。やっぱり富士屋本店は愛されているなあ。

その列はなかなか進まなかった。しびれを切らし、暇だったので、前の人に話しかけてみることにした。話を聞くと、その人はサラリーマンで、恵比寿で働いているらしい。メガネをかけた、少しガタイのよい、優しいおじさんという感じ。昔来たことがあって、今日が最終日だからまた来たとのこと。

「最終日、明日だと思っていたが、今日だったからびっくりした」

確かに、明日が十月三十一日で、十月最終日。再開発組合の話合いで、立ち退きが決まっているのは十月いっぱいのはず。明日は何をするのだろう。

「中は意外と広いんだよ」と、そのおじさん。

「そうですね。外からだとわからないですけど」と、私。以前、来たことがあるから分かる。ビルの地下一階にお店が広がっているのだ。

「あ、来たことあるんだ」

「あ、そうなんですよ」

「最後、入れるといいね」

「そうですね。閉店前なんでお別れを告げたいです」

「そうだね」

秋も深まり、夜はさすがに寒くなってきた。ビル風もびゅうつと吹き、身に応える。何かあったかい飲み物が提供されればいいのに。どうせ閉店するんだから物も残せないし、売り尽くしということで、熱燗でも振舞ってくればいいのに。あんまり熱燗好きじゃないけど。「ハムキャ別」（ハムキャベツのこと）食べたい。

でも実際はそうだったことはなかった。現実はそう甘くはなかった。営業最終日に駆けつけた富士屋本店ファンたちのことはあまり気にかけていないのかなあ。ただ単に中が忙しい可能性もあるけど。

店内から、最後の富士屋本店にありつけたお客さんが出てくる。

「いやあ、よかったな」

「楽しかったわ」

「最後よかったな」

「ごちそうさまでしたあ」

「見て、めっちゃ並んでる」

「うわ、ホントだ。ラッキーだな俺ら」

「な。いや、よかったよかった」

彼らは渋谷駅の方に歩いて行った。ちょっとムカつくけど、まあいい。

そうやってお客さんが店内から出てくると、ぼちぼちと列が進む。結果、一時間ほど待ったところで、先に前のおじさんが店内へ入れることに。

「じゃあ、お先に失礼するね」

「楽しんでください」

それから間も無く、大体三分くらいだっただろうか、私も入れることに。さっきのおじさんからあまりにも早かったので驚いてしまった。「お待たせしました」

地上から階段を降り、地下にある店内へ。案内されるときに店員に「今日は一時間

制なのであらかじめご了承ください」と言われた。「あ、そうなんですわね。わかりました」と答えた。それにしても列は進んでいなかったけどなあ。

火曜日の夜ではあったが、最終日もあって、中は満員で、溢れかえっていた。金曜日の夜に寄ったこともあるが、その時よりもぎゅっちりと、みゅっちりと人が入っていた。熱気がこもり、もわっとなっていた。案内された席は入り口横から少し外れて奥の方だった。女将さんと話しかかったが、遠くて出来なさそう。カウンターを囲む常連客風のおじさんたちと談笑している。時々冗談を言い合って大声をあげて笑っていた。楽しそう。さっきのおじさんは近くにいない。とりあえず着いてすぐ、レモンサワーとハムキャベツ、自家製ポテトサラダ、肉どうふを注文。しかし、店員に断られてしまった。「すいません、ハムキャベツ、もう出ちゃって〜」なんだって。先に言うてよく、それ。並んでいるとき時間あったじゃん。「あゝ、残念。わかりました、はい」「すいません」

料理は全て盛りもいいし味もいい。ポテトサラダも二、三人前くらいある。お一人様には多いくらいだ。肉どうふは冷えた体に染み渡った。追加でしいたげ天と鳥からを注文。定番のなすみそとネギヌタは残念ながらもう売り切れてしまったらしい。そ

のほかにもいろんなメニューが完売している模様。追加の品が届いたときにホッピーを注文した。店員さんは忙しそうに話しかけられなかった。ちょっと話したかったが仕方ない。

みんな帰りたくなさそうだった。それでもやはり一時間制のようで、あまりにも長くいるお客さんに対しては「ホントにすいません、今日最後なんで、待ってるお客さんが外にいるんで、ご協力お願いしますよ」と言って、退店を促していた。勘定をしたようだ。「ホントありがとうございます、ありがとうございます」

店内は活気で満ちていた。この場がなくなるなんてもったいないなと思った。立ち呑み屋で、美味しいお酒と美味しい料理をおかずに、次から次へと話に花が咲く。この空気感はどこにもない。誰とでも仲良くなれそうな雰囲気だ。ホッピーが届き、混ぜて作っていると、近くのおっちゃんに話しかけられた。できあがっているようだ。

「珍しいね。今時若いのが一人でホッピー？」

「若くないですよ。それにホッピー美味しいじゃないですか。体にも比較的いいし」

「わけーよ、なっ？」と連れのおっちゃんに聞く。

「若いね」

「なあ。ま、これもなんかの縁だし、乾杯しようや」

「かんぱーい」

三人で乾杯した後、しめ鯖をご馳走になった。しめ鯖も美味しかった。どうやら次のお店にはしごするらしく、もう出るとのこと。勘定するとき「お釣りいらさないからあげる」と言われ、なぜか二八〇円もらってしまった。勢いがすぐく断ることができなかった。「では、また」本堂に行ってしまった。嵐のように過ぎ去っていった。

ほろ酔いになり、時計を見てみると二十時十分くらいだった。待っている時間の方が、飲みの時間より長いというのはなんだか癪だったが、外で待っている人のことを考えると、少しでも楽しめた私は次に譲った方がいいのではないかと思えた。少しだけ余っているホッピーを飲み干し、勘定をした。勘定の際、やはり忙しそうで少しだけ遅れたが、店員さんがやってきて最後に「本堂にありがとうございまして」とだけ言われた。意外と別れはあっという間だし、さっぱりしているなと思った。もう少し別れを惜しむように懐かしんだり、再開発のことについて話したりしたかったんだけどなあ。写真も撮りたかった。

物足りなさが残りつつ、地上に上がった。二十時十五分くらいだったが、驚くこと

に未だにさっきと同じくらいの列ができていた。正直、後ろのお客さんは入れないかなあと思った。物足りなさを感じると同時に、せっかくだし、閉店する瞬間まで立ち会うことにした。向かいの建物の軒下に立ち、最後の富士屋本店を野次馬的に見物すること。

店内を出てから気づいたのだが、店頭に張り紙があり、「本日最終日につき一時間限りでお願いします」と小さく書かれていた。ちょっと分かりにくいよ。

見物を始めて五分くらい経った時に、店内から男三人グループのお客さんが出てきた。「写真撮ろーぜ」近くにいた私は、撮影をお願いしてしまった。暇だったから了承したが、いぎ撮ろうとしてみると、「大衆立吞居酒屋 富士屋本店 清酒 カンパイ」と書かれた電光掲示板の照り返しが厳しく逆光状態。

「逆光なんですけど、いいですか」

「いいっすよいいっすよ」

「フラッシュたいてちゃってください」

「いきまーす、はい、チーズ」

正直上手く撮れなかったが、めんどくさかったので、とりあえず撮影して返すこと

にした。

「ありがとうございませう」

それから二十分くらい経過したとき、白髪ロングのおっちゃん店員が出てきた。そして突然、「終わりです！」と叫んだ。あまりにも突然で状況がつかめない。どうやら列に並んでいる人も同じ感じらしい。困惑している表情を浮かべているだけで列を崩そうとはしない。それに負けじという感じで、白髪ロングおっちゃん店員は圧強めで「本当に終わりですから！」「もうなんにも、ありません！」「終わらせてください！」「フツーー！に！終わりましたよ！」と繰り返し叫んでいた。その語気が強い説得に負けてか、列を作っていた数人は諦めて帰っていった。でも納得していないようで、途中で振り返ったり、抗議したりする人もいた。粘りが強いお客もいて、「外飲みでもいいから」「余っているの少しでもいいから」「いくらでも待つから」と懇願していた。それでも白髪ロングおっちゃん店員は「フツーに終わりましたよ、フツーに。そういうお店じゃウチはないんですから」と繰り返しそれだけを言っていた。抗議するお客にも、列を未だに崩そうとしないお客にも。それでも一部の富士屋本店ファンは諦めず、店先で待っている。確かに考えてみれば、一時間くらい待っているわけ

だし、何かしら余ってそうだし、少なくとも一品くらいにはありつけると思うのも当然だろう。そう思ってた寒い中長い間待っていたのにこの始末だものね。

白髪ロングおっちゃん店員は「終わり」を際立たせようと、富士屋本店の地下に続く階段の明かりを消したら、「その明かりは消さないで」と店の中から声が聞こえた。店内のコミュニケーションも上手く取れていない様子。

「今日は終わり」との知らせを聞いて叫ぶ女性が居た。「ええーっ！？」その女性は男性二人と来ていた模様。連れの男性に対して「信じらんないんだけど。最終日にこだけ待って入れないの!？」と叫んでいた。それに対して白髪ロングおっちゃん店員は「もうなんにもないんです」と連呼していた。私にはお客を返す言い訳をその場で繕っているようにしか映らなかった。それがたとえ事実だとしても。謝ることなく、上から高圧的に断っている印象残ってしまうのは残念だ。

白髪ロングおっちゃん店員は最終兵器と言わんばかりに、「営業終了」の看板をどこからともなく持ってきた。看板はかなり大きく、百二十センチメートルくらいあると思う。用心棒みたいに、店内への入り口のところ立ち、その看板を地面に何度もとんと叩きつけている。そしてまた「終わりです」と言う。ちょっと怖かった。

しばらくして、白髪ロングおっちゃん店員が、後ろの方に居た女性のグループに「営業終了」の看板で写真を撮ってもいいよと言い、ベストポジションに案内した。そういうことはするのね、と心の中で思わずツツこんでしまった。そういったファン対応みたいなことはするのに、なんでもっと「いい終わり方」をしようと思わなかったのだろうか。例えば、整理券を配って、ある番号のお客さんまではあるもの限りで対応する、とか。八時以降は並んでもらわないで、最後尾で丁重に感謝を述べお断りする、とか。方法はいくらでもあっただろうに。これまでの思い出が瓦解したお客さんが中にはいただろうなあと思うと心が痛かった。

ディズニールランドに来た女子高生みたいな記念撮影が終わったあと、常連客と思わしきお客の一人が、白髪ロングおっちゃん店員と小声で話していた。面識があるらしく、よしみで中に入れてもらおうという作戦だったらしい。お客がなし崩しの口説くも、「そういうこと言わないでさ。一人でも入れちゃうと、ほら、みんな入っちゃうからさ」と白髪ロングおっちゃん店員が拒んでいた。

最終的に、場が収まらず、店主のような方が出てきた。とても物腰の柔らかい方だった。ものすごく謙虚に「寒い中お待たせして申し訳ありません。案内できずすみませ

2018年10月30日

ん」と謝ったことでほだされて、これまで帰らなかったお客も帰り始めた。店員の態度一つで、こうも変わるのかと気付かされた。愛されているお店だけでもうちちょっと終わり方を工夫して欲しかった。

列に残っていた最後のお客が帰るまで私は見ていた。最後の一人が観念して立ち去った後、私も帰路に着いた。料理やお酒は美味しかったが、閉店の後味は不味かった。

あとがき

M A M A

私たちのグループは桜丘の再開発地域をフィールドに、閉店するお店の最後の瞬間に居合わせることを繰り返してきました。

居合わせることで分かったのは、「想像していたよりも閉店は『さっぱり』している」ということです。閉店は特別な盛り上がりを持つという想像を誰しも持っているようです。例えば、閉店セレモニーに代表されるように、最終日にお店の代表が挨拶をしたり、お客さんが拍手でシャッターが降りる瞬間を見送ったりするような理想像です。そういうイメージを持っているために、実際に居合わせると「さっぱりしている」と感じるのです。つまり誰もが閉店に対して同じようなイメージを抱き、過度に意味付けをしてしまっているということです。閉店の理想像のようなものを共有しているとも言えます。この発見から、私たちのグループは、閉店の理想と現実と着目することにしました。

立ち会って分かった閉店の理想と現実をまとめた文庫本をつくることにしました。それがこの本になります。名前の「とじとじ」は「(お店を)閉じる」と「(本を)綴じる」から取っています。この本では、三店舗(「かいどう」「あおい書店」「富士屋本店」)の閉店に対してそれぞれの理想と現実がまとまっています。居合わせた一人がその閉店の現実を描き、居合わせていない一人がその閉店の理想を想像しながら描きます。

一店舗の閉店に対し現実と理想について二つの物語があるので、計六つの物語があります。その物語を単に順番通り並べて綴じるのではなく、書かれている物語が読者に理想か現実か分からないよう工夫しました。具体的な方法は次の通りです。章が順番に「かいどう」「あおい書店」「富士屋本店」に分かれています。それぞれ理想か現実になっています。つまり二の三乗で八通りの組み合わせがあります。これになります。この本も合計で八種類つくることにしました。そのため、実はこの一冊はその一種類に過ぎません。この一冊の他に七種類の『とじとじ』があります。

この物語を読んでもらうことにより、読者に閉店を体験してもらうことが可能になります。そしてその体験の中で、私たちのグループが伝えたかった「きっぱり」感や理想と現実のギャップを理解できる仕組みになっています。

理想というのは、嘘ではありません。そもそも期待していたある種の真実です。『とじ・桜丘閉店物語』という媒介を通じて、閉店の真実を描こうとする試みなのです。

最後に、校正にご協力いただいた太田風美さん、『『桜丘閉店物語』によせて』を書いてくださった加藤文俊先生には感謝しきれません。本当にお世話になりました。この場を借りて感謝申し上げます。

『桜丘閉店物語』によせて

加藤文俊

閉店は、午前零時だと聞いていた。少し早く着いたので、店内をぶらぶらしながら過ごすことにした。平日だったためか、深夜の店内に客の姿はまばらだった。あらためてふり返ってみると、時間つぶしに立ち読みするばかりで、この店で本を買った記憶がなかった。ちょっと申し訳ない気分になる。ひととおり書棚を眺めてから、せっかくなので、本を三冊えらんだ。『日本史の論点』『薄情』『手ぶらで生きる。』は、最初で最後の買い物になった。あと十分もすれば閉店になる。レジのカウンターを挟んで、店員と事務的にやりとりをする。顔を覚えられているわけでもないし、そもそも、「長い間、ご苦勞さまでした」などとという台詞が、自然に出てくるほどの想いもない。ぼくは、たんに閉店の瞬間に「居合わせる」ことを目的に訪れた、野次馬のような存在なのだ。

店の外に出て、午前零時を待った。店内には、数名の客しかいないはずだ。そして、

ほぼ定刻どおりに、シャッターが半分くらい下ろされた。ドアの下半分から、店内の白い灯りがもれている。閉店の瞬間に立ち会おうという人は、他には誰もいない。帰路を急ぐ人びとは、ほとんど無関心のように、店には目もくれずに歩道橋に向かう。

ぼくは、いつの間にか「最後の日」を、ドラマチックなものに仕立て上げていたようだ。もちろん、界限では「さよならパーティー」を開く店も、別れを惜しむ常連たちや（ぼくのような）野次馬的な客の行列ができる店もある。それなりに、感情的なつながりを感じていた場所もあった。あのジャズ喫茶も、ついに看板を下ろした。ぼくが長年通っている歯科医院は、気づけば移転していた。何事もないかのように、ごくふつうにシャッターが下りるのを見て拍子抜けしたのは、ぼくが勝手に想い描いていた「最後の日」のイメージと大きくかけ離れていたからだ。一人ひとりに個性があるように、「閉店」の迎え方はさまざまだ。そう考えれば、ごく自然に閉じる店があっても不思議ではない。

あれからも、たびたび閉店後の書店の前を通りかかる。いまでは、窓ガラスはベニヤ板で覆われている。夜ごとに、大がかりな工事がくり返される。ほどなく、この一帯は大きな仮囲いの向こう側に隠れてしまうだろう。仮囲いができればなおさらのこ

と、工事現場はぼくの日常から隔離されてゆくにちがいない。じっくりえらんだはずの三冊の本は、ろくに開かないまま、すでに書棚に埋もれてしまった。『薄情』なほどに。

もちろん、店主や常連たちの毎日は、あの晩を境に大きく変わったはずだ。シャッターが開かなくなったのは、大規模な再開発計画の都合によるものだ。誰かが決めた「最後」なのに、ぼくたちは過剰に反応する。メディアでは、たびたび感傷的なシーンが描かれる。長きにわたって愛されてきた店は、惜しまれながらシャッターを閉じる。再開発の計画は、無遠慮に古き良き風景をのみ込んでゆく。だが、そんな「ものがたり」さえも、ぼくの想像にすぎないのだ。だから、「最後」かどうかは、ぼくが決めればいい。「閉店物語」は、いくつもある。むしろ、いくつもあったほうがいいだろう。

『桜丘閉店物語』は、不思議な本だ。同じ形や大ききで、同じ表紙をまもっていながら、中身が（微妙に）ちがう本があるというのだ。手に取った本には、どのようなエピソードが束ねられているのか。それは、まちで偶然に出くわすハプニングのようなものだ。まさに、閉店をめぐる「ものがたり」がいくつもありうることを、まっすぐに伝えようとしている。その素直さが、気持ちいい。「最後の日」に居合わせた人も、

頭のなかでドラマチックな光景を思い浮かべた人も。そして、数か月にわたって、桜丘を歩いた三人も。一つひとつの「ものがたり」が、「真実」かどうかは問題ではない。フィールドワークを重ねながら変化を目撃し、幾度もまちについて語ったうえで綴られたのだから、すべてが「本当」なのだ。大切なのは、まちの風景が大きく変わってしまったとしても、このちいさな本があれば、ぼくたちは、また「閉店物語」を語りたくなるということだ。

とじとじ - 桜丘閉店物語 -

paikka books

ま - 3 - 5



平成三十一年一月二十二日発行

著者 M A M A

(木村真清・笹川陽子・染谷めい)

慶應義塾大学加藤研究室

〒二五二〇八八二神奈川県藤沢市遠藤五三三二

慶應義塾湘南藤沢キャンパス

<http://vanotica.net/paikka/>

無断複写・複製・転載を禁じます。

ISBN4-15-03-112469-4 C0194